

銀

賞

『鯨のオーエン』

『鯨のオーエン』

福島県 尚志高等学校二年 七^な海^{うみ}千^ち夏^か

董^{きんせい}青^{せい}石^{せき}の青より青い、厚い雲のかかる海に、鯨の人魚が暮らしていました。

彼は名前を与えられるよりも幼いときに群れからはぐれ、暖かい海からこの冷たい海に流されました。猛^{たけ}る波や荒い潮に削^{けず}られながら、なんとか青年の歳^{とし}まで生き延びた彼。孤独の彼の心には、いつも氷柱^{つらら}が刺^ささったような穴が開いていました。彼はその心の小さな穴を、見て見ぬふりをしてやり過^{すご}していました。しかし彼は時々こんなことをひとりごちるようになりました。

「僕はなぜ、なんのために生きているのだろう」

その疑問は彼を深淵^{しんえん}に誘^{さそ}うと同時に、きらきら輝いていました。光のない深海で、彼を好奇と探求に駆^かり立てる小さくて確かな光。彼はいつも考えていました。胸に希望が満ちたり、絶望に押しつぶされたり、彼は、生きること必死だった幼少の頃にはあり得ないほど豊かに、目まぐるしく心を動かしました。「ぎつと何かを成すために一人でも生き残った、残されたのだ」。その小さな結論が彼をいつそう強く生かしました。

ある日のこと。彼はいつもより深く潜^{もぐ}りました。自分を取り巻く暗闇^{くらやみ}も、子供のころは恐ろしくて仕方なかった重たい水の流れも、希望ある今の彼には怖^{こわ}くありません。

彼は目線の濃^こい藍^{あい}の中に、白い光があるのを見つけました。それは近づくほど大きく、煌々^{こうこう}と輝くのです。

彼は光の奥底に大きな影が揺らめいていることに気づき、目を見張りました。それは人魚ではなく、岩でもな

い、マストが折れて胴の割れた船の亡骸^{なきがら}でした。彼は初めて見る沈没船に驚きながら、そしておっかなびつき、それでも抑えきれぬ好奇心のままに近づきました。光源は、折れたマストの先に掛かったランプでした。暗がりで見える光の特別な神聖さに少しの間見惚^{みほ}れ、そして胴の割れ目から沈没船の中へと進みました。彼は船もランプも知りませんでした。しかし恐れず、未知に魅^み了^{りょう}されるままに進みます。まるで導かれるように、彼の為に舗装^{ほそう}された道があるように。

ランプの光が僅^{わず}かしか届かない船室の中は、荒れきっていました。豪華な家具の彫金^{ちゆうきん}は錆びついて輝きを失い、壁の絵は傾き褪^あせています。色彩のない世界で彼は、孤独な旅路の最中には見られなかった数々に圧倒されていました。そして彼は絵に惹^ひかれ、しつかりと見てみたくなり、派手に額装^{がくそう}された大きな絵をランプの光の下に持ち出しました。そこに描かれていたのは、奇怪な生き物です。自分によく似た上半身を持ちながら、身体^{からだ}の下半分は魚の形をしています。腕より太くて長い肢^{あし}の先に、歪^{いびつ}な手のような部位が続いている、奇妙な生き物でした。彼はまじまじと見つめます。

「これは、なんだろう。海の中では見たことがない」

誰にともなくささやくと、

「それは、にんげんという」

暗闇の向こうから、そう答える声が聞こえました。その声は低く、艶^{つや}もなくおそろしく、そして鯨^{くじら}の彼にとつては久しく聞いていなかった他者の声でした。彼は驚いて声の方を向きます。すると闇からランプの光芒^{こうぼう}の中へ、絵画の中の生き物によく似たものが進み出しました。

「私の家に何の用だろうか」

照らし出されたのは肌と髪はだの白い瘦やせた男でした。じとりと鯨の彼を睨にらんで、不機嫌そうにしています。鯨は
「氣まづさでうわづった声で答えました。」

「僕は狩かりをしていたら、物珍ものめずしくも光が見えたので興味のままだち寄ってしまったのです。ご不快な思いをさ
せてしまい申し訳ない」

「別に家に勝手に上がり込んだことは怒おこっていない。問題はその絵を見て、何を思ったかだ。おまえは、その絵
に何を思った？ 何を見た？」

男は厳おとこかに問います。鯨は、すこし考えてからこう言いました。

「不思議な気持ちです。僕の知らないことばかりで」

「浮うかんだ疑問を言ってみなさい」男は答えます。

「あなたは、この絵に描かれている『にんげん』なのですか？ この、奇妙な形の、鱗うろこのない二股ふたまたの尾おひれは何
ですか？ そして彼らはどこに生きているのでしょうか、水の中ではない場所にいるように思えます」

すると男は愉快というふうに笑ってから言いました。

「驚いた。おまえは人間を知らぬままその年まで生きたというのか」

「ずっと小さいころに群れと離れてしまい、勉強をしたことがないので」

「なるほど。わかった、その疑問すべてに答えよう、絵があった部屋で話そう」

上機嫌じょうきげんな男は鯨の彼を先ほどのうす暗い部屋に招まねぎます。そして腐くさりかけた鉄骨に腰かけて言いました。

「自己紹介をしよう。私の名前はアルブレヒト、絵の中の生き物と同じ『にんげん』で、二千年前に『にんげん』
の世界に見切りをつけて深海にやってきた魔法使いだ。醜みにくくも永遠を求める強欲ごうよくな男だと思え」

「にんげんというのは二千年も生きるものなのですか？」

鯨は驚いて言いました。

「いいや、私が特別な魔法で生き延びているだけだ。ふつつは皆百年経たずに死ぬ」

男は「残酷だろう」と自嘲のように笑い、ゆったりと話を続けます。

「二つ目の質問には答えた。次の話をしよう。おまえの言う、鱗の無い二つに裂けた尾ひれは『足』と名がついている。人間の世界はひれでは移動ができない。水の代わりに空気というもので満たされている。空という蓋と地面という底がある世界だ」

話を聞いて鯨は、きらきらと目を輝かせました。それを見た男は嬉しくなり、さらに多くを語りました。人間の世界には多くのクニというヒトのまとまりが存在したこと、肌の色も目の色もさまざまなこと、それによっていさかいが起こったこと、人間は鯨たち人魚のことを架空の生き物だと思っていること。そして男は語りました。「人間の世界には、人魚が人間になる物語がある。女の人魚が魔法で人間になって、恋をした男のもとに向かう物語だ。悲しい話だがね」

それを聞いた鯨は魂を震わせました。そして言いました。

「それ、僕もやってみたいと思います。陸の世界へ、行ってみたい」

「ほう。おまえも人間になってみたいと言うのか」

「僕はずっと独りぼっちでした。でもにんげんの世界には、数えきれないほどの人がいる。つまり、独りぼっちじゃなくなる、ということですよね」

鯨は希望に満ちた早口で言いました。

「それに、この暗い海の底にはないものがたくさんある。僕、いつも考えていたんです。どうして自分は生きているのだらうと。その答えが、少し見えた気がします。知らない世界に行くために生まれて、そこで誰かとお会いするために生かされたんです。魔法使いさん、どうか僕をにんげんにしてくださいませんか。なんでもします」

あまりにも、輝く声でそう言いました。男は声のきらめきに圧倒され、驚いて、ゆっくりと問い直しました。

「軽々しく『なんでもする』なんて言うんじゃない。けれど、その思いが本気ならば、私も答えよう。具体的に言え。おまえは人間になって、何を望む?」

鯨は、真剣な眼差しで、逸る心を押さえつけて答えます。

「未知の世界で、一生愛する友達を、誰かを探したいです」

男は頼もしく微笑みました。そして、部屋ほほえの隅に転がっていた銀色の杖つえを拾い上げて言いました。

「良いだらう。おまえを人間にしてやる。でも無償じゃない、対価がいる、そして人間になるにも段階を踏まなくてはいいくない」

男は言い聞かせるように話を続けます。

「私の魔法でおまえを人間の形で生きながらえさせるにはせいぜい百年が限界だ。百年以内に誰かから愛を与えられればお前は本物の人間になる」

鯨は力強く頷うなずきます。そして、ふたつ問いました。

「本物の人間になる前は何になるのですか? そして、百年誰からも愛されることがなかったときは?」

「本物の人間になる前は、真珠しんじゅの人形になる。人格と記憶は真珠の中に混ぜ込まれ、しゃべることもできる。そして百年誰からも愛されなかったら」

男は一息^{ひといき}ついて、悲しそうに言いました。

「真珠の体の真ん中、心臓のあたりに小瓶^{こびん}が入っている。中身は強酸だ。これが破裂して、真珠の体を溶^とかす。おまえは死ぬ」

「どうしてそんなこと……？」

「生まれ変わるための魔法に失敗したときの対価は、命だからだ」

鯨は息を呑^のみました。あり得るかもしれない残酷^{ざんこく}な未来に、背中が冷たくなりました。

けれども鯨は、弱気を押し殺して、ただ一言、

「それでも、陸の世界を見たい」

と答えました。男は「そこまで言われちゃあしょうがない」と杖をかざし、言いました。

「ならば魔法をかけよう」

鯨は魔法にかけられ、光に包まれました。段々と意識が薄れ、そして自分の身体が透^すていくのを感じます。

最後に男は、光の中の鯨に聞きました。

「そっだ、おまえ、名前は？」

鯨は答えます。「僕には名前が無いのです」と。

すると男は笑って言いました。

「ならば名付けよう。おまえはオーエン。名前はオーエンだ」

オーエンが目を覚めたのは、柔らかな真白の砂浜でした。肺と鼻で息をするのだとアルブレヒトに教わった

ことを思い出し、赤子のように覚束ない、初めての呼吸をしました。それから上体を起こして座り、ぼろのローブをまとった、人間になった自分の身体を眺めます。真珠の純白に輝く滑らかな肌は、かつて尾ひれだった下肢にできた「足」まで覆っていました。桜貝の爪、肩まで伸びた黒い髪。形だけは、絵画で見た通りの人間になっていました。オーエンはゆっくりと、絵画の人間たちがそうしていたように立ち上がります。一步一步、歩くたびに沈み込む砂浜を歩いてゆきます。全身に感じる風に、潮とはまた変わった心地よさを覚えました。そして空を見上げます。深海の濃紺に似た色彩が頭上いっぱいに広がります。そこには海の表層に弾く泡によく似た、無数の小さな光が明滅を繰り返していました。

「そつだ、にんげんに会いに行かなきゃ。とにかく海から遠い所へ」

オーエンは呟きました。そして、重たい真珠の身体で海を背に歩き始めました。

深い、深い夜の中をさまようオーエン。真珠の肌は満月の光を受けて白く輝きました。歩く道は砂浜から木々の茂る山へ、緩い傾斜を登ってゆきます。やがてその傾斜が平らになったとき、視界が開けました。眼前に広がるのは、傾いた満月の光を受けて輝く真夏の野生でした。光合成を一体みして深く呼吸する花々、束ねた静謐に僅かなノイズを含んだ波の音、微熱の風。オーエンは圧倒されて立ち尽くしました。無言のうちに流れてゆく時間は、静かに視界に色彩を映してゆきます。やがて空が橙に焼けて、琥珀の糸がたわみ、空が珊瑚礁の海より真っ青になって太陽が白く高くなるまで立ち尽くしていました。オーエンは真珠の胸が、興奮でドキドキするのを感じました。

「陸の世界は、こんなに色に溢れていて美しいんだ」

オーエンはそう言うと、また真つすぐに歩き出しました。人間のいるところを探して。

オーエンは山を越えて、流れ着いた浜の裏手にたどり着きました。まだ人間と出会っていません。陸にやってきて一日目は誰とも出会えませんでした。

二日目。オーエンはあることに気づきます。この島はひどく小さく、島を取り囲む砂浜を一周するのに半日とかならないのです。胸に一抹の不安を抱きました。

三日目、いよいよオーエンはこの島の真実を知ってしまいました。この島は無_り人島なのです。人間がいないのです。不安は大きくなる一方でした。

「だれか、遠いどこから船がやってきて僕を見つけてくれる」そう信じることで、自分を奮_{ふる}い立たせました。

四日目。オーエンは暇_{ひま}を持てあまして、山に入りました。これまで見ていない所を見てまわろうと。そしてオーエンは奇妙なものを見つけました。丸い金属の蓋が地面に張り付いているのです。それを無理やり退_めかしてみると、地下へ通_とずる梯子_{はし}が下りていました。なにかあるに違いないと中へ降りてゆきます。穴の中は無機_{むきじつ}質_{しつ}な白い光で満ちていました。

地面に足を付けたとき、初めてきちんと穴の中全体を見渡しました。そこはまるで、山一_いつくり抜いて作ったような秘密基地でした。きよろきよると辺りを見渡しながら歩いていくと、オーエンの背丈よりも大きな機

械にぶつかりました。それは円錐えんすいの形をした金属かふしよの塊かたまりです。オーエンはそれを見上げました。そのとき、機械の影から誰か小さい子供が飛び出しました。

「きみ、誰？」

その誰かはそうオーエンに問いました。朝焼けの金に似た髪、オーエンより小さな体。それは人間によく似ていましたが、オーエンのような、硬そうな体をしていました。オーエンはそのだれかに問いました。

「きみ、にんげん？ 僕はオーエン。元人魚で、いまは人形だ。僕は僕を愛してくれるにんげんをさがしている」
すると目の前の彼は答えました。

「人間は遠い昔に滅ほろびたよ」

信じがたくも確かなその言葉は、秘密基地に静かに響ひびきました。

「戦争で人が滅いんせきり、隕石いんせきと温暖化で陸地が滅いんせきった。陸地が減るから生き残りをかけてまた戦争が起きて、国が最後の一つになるまでそれを繰り返したんだ。この小さな島は、最後の国のなごり。この地球で最後の陸地」

オーエンは彼が何を言っているか理解できず、いえ、理解はしましたが信じられずに黙だまり込んで下を向きました。そこに追い打ちをかけるように、目の前の彼は続けます。

「そしてね、最後に残った国は宇宙にコロニーを作つて、人間を選んで送ったんだ。そして選ばれなかった人たちはみんな海に逃げた。植物プランクトンと融合ゆうごうして、浅い海でなら生きていけるようになったんだ。つまりこの星に君が探している人間は、いない。ぼくは地球の滅びが記されたゴールデンコードと一緒にいつか宇宙に旅立つんだ……親切なだれかが手を貸してくれる日が来れば。ぼくは遠い宇宙を愛している、人型ロボット探査たんさ機きハラパン、形ある心を持たされた機械」

怒涛^{どとう}の情報量に、オーエンは目が回る思いをしました。しかし時間をかけて理解したこの星の惨状^{さんじょう}に、いつそう言葉を失いました。しかしハラパンの言葉を思い出すうち、無言の失意にひとすじの光が差ししました。ハラパンは宇宙を愛すると言いました。何かを愛する心があるということとは、自分を愛してくれるかもしれない可能性が残っているからです。オーエンは勇気を出して聞きました。

「僕は誰かに愛されなきゃ百年後に死んじゃうんだ。ハラパン、僕を愛してくれる？」

するとハラパンは少し考えてから答えました。

「愛とは技術さ。長らく人に会っていないばかりには、愛がわからない。だからしばらく一緒にいてみよう」

その言葉にオーエンは微笑^{ほほえ}みました。

そしてその後、二人は十年間を一緒に過ごしました。お互いのもつ全てを語り合い、夜になれば星を見るだけの十年間でした。それでもお互いが初めての友達になる二人には、その日々は夢のように輝いて記憶に刻^{きざ}まれました。

「ぼくに記録された、人間の描いた模様は悲しみに閉じられたけど、その線と点は希望で出来ていた。終わりがあから美しい命たちの希望の叫びを、ぼくは託^{たく}されている」

十年の会話の中で、ハラパンは何度もそう言って空を仰^{あお}ぎました。宇宙に思いを馳^はせる彼の瞳^{ひとみ}は不思議な色に輝きました。それは、ハラパンの心の動きを映しているように思われました。

そして十年と一日目の朝、オーエンはハラパンに問いました。

「どうだい、僕のこと、愛せそっかい？」

するとハラパンは申し訳なさそうに答えました。

「ごめんねオーエン。僕の心は、宇宙と人間以外を愛するようには作られていないみたいだ。きみは人魚だから、愛の対象にインプットされていないのさ」

それを聞いたオーエンはひどくショックを受けました。目の前の彼は自分を愛さない。その事實は、オーエンの死を意味します。しかしオーエンはハラパンと過ごした十年間を思い出すと、初めてできた友達を尊く思うことで精一杯でした。そしてオーエンは言いました。

「なら僕は、君が宇宙と人間を愛する手伝いをしたい。僕が君を宇宙まで送るよ」

「きみ、ぼくのせいで死んじゃうんだろ？　ならぼくなんか酷いやつのためにそんなことしないでいいんだ、きみは」

「いいや、やらせてよ。何もしないで死ぬよりずっといい」

オーエンは失意を飲みこみ、信念と希望に満ちた目で言いました。ハラパンはその瞳を見て「ありがとう」と心から答えました。

その次の朝からオーエンは、先人たちが残した手引書の手はず通りに、円錐えんすいの機械を点検するところから全てを始めました。円錐の機械の名はロケットということ、打ち出すには燃料が必要なこと、精密せいみつにすべてを決めなければいけないこと。あらゆる問題を解決するために、オーエンとハラパンは八十年かかりました。作業で眠れない夜と、計算だらけの朝を超えてゆきました。オーエンの原動力げんどうりきは、ハラパンに幸せになつてほしいという一心いっしんでした。

そしていよいよ、出発の朝を迎えました。歴史を刻んだゴールデンレコードを胸にしまったハラパンはロケッ

トに乗り込みます。オーエンは秘密基地の小さな管制室^{かんせいしつ}からハラパンに最後のお別れを告げました。

「さよならの前に教えてほしい。君、今幸せかい？」

そう言ってレバーを倒すと、山が半分に割れて秘密基地の床がせり上がり、ロケットがむき出しになりました。そして島にカウントダウンが響きます。ハラパンは言いました。

「ありがとう、オーエン。幸せだよ」

「それならいいんだ。ほっとした」

大きな地響きと共に、ロケットは旅立ちました。オーエンはその光景を、ロケットが星になって消えるまで笑顔で見送りました。

静かな夜のとばりが、二人きりだった世界を包んでいます。オーエンは力が抜けてふらふらと立ち上がり、そのままゆっくり浜辺へ歩きだしました。

オーエンは月光を受けて青白く輝く砂浜に横たわり、身体を丸めて泣きました。このあと自分がどうなるか、思い出したのです。真珠の頬^{ほお}を滑る水は、海と同じ味がします。もしも引き留^{とど}めていたら、と何度も後悔^{こうかい}しました。古くなってしまった記憶を追想^{つしやう}しても救われないのは分かりきっています。それでも迫^{せま}りくる死を前に、恐ろしくて泣きながら愛を祈りました。

しかし彼は祈る傍^{かたわ}ら、自身のしたことを認めていたのです。誰も救われないよりは、地球最後の希望を空の彼方^{かなた}に送り出したことを「良かった」と思っていたのです。その感情は後悔とぶつかり、真珠の胸を内側から焦^こがしました。オーエンは残った長い時間を、秘密基地と浜辺の往復で過ごしました。それは初めて誰かに寄り

添った、尊い記憶のなつかしさをなぞることでした。残された十年の時間は心を削りながら、しかしあつという間に過ぎてゆきました。オーエンはやがて死を、終わりを覚悟しました。かつての語らいの中で、終わりがあから命は美しいのだと言ったハラパンを思い出しながら、最後の眠りにつきました。

百年と一日目、オーエンは白い砂浜で目を覚ましました。

ないはずの朝を、オーエンは迎えたのです。オーエンの真珠の肌は柔らかい人間の皮膚に変わり、肉の体と、息をするたびに広がる胸を手に入れました。オーエンは驚き、喜び、涙を流しました。そして空を仰ぎ、言いました。

「もしかして、君、僕を愛してくれたのかい？」

その言葉は青い波間に消えました。

一方そのころハラパンは、遠くなった地球を見つめて言いました。

「きみがぼくの幸せを願ってくれたこと、これってぼくへの愛だったのかしら。だとしたらきみを幸せにできなかったぼくの、この後悔も愛なのかな。ゆるしてくれ、ぼくはさつき、ぼくを幸せにしてくれたきみに幸福があるように祈ったばかりだ」

そしてまぶたを閉じて、つぶやきました。

「きみを幸せにしたいと、今から地球に戻って言いに行ったら、きみは怒るかしら」

